

シベリア鉄道で兵隊さんと連夜の飲み会 ①

近藤 節夫 (エッセイスト)

列車内の設備としては、各車両に湯沸かし器が設置されており、インスタント食品やコーヒー用に利用することができたが、困ったのは1等車に備わっているシャワーが2等車には据え付けられていないことだった。幸い汗を掻くことこそなかったが、身体を洗い流すことができず気持ちはすっきりしなかった。中でも使い難かったのは、トイレだった。2等車には各車両の後部に男女共用の和式トイレが付いていた。フツと下を覗くと何と雪と線路が後方に流れていく。逆に冷たい空気が入り込んでくる。いわゆる垂れ流しだった。つい戦後間もないころの列

車にも話し合い、飲み合い、笑い合ってお互いを知り日ロ友好の実を上げた貴重な時間となった。モスクワが近いとの車内アナウンスを聞いて、思わず感慨無量になり我知らず胸に込み上げてくるものがあつた。もうこのような行き当たりばったりでダイナミックな旅をすることはないだろう。千載一遇とも言える好感の持てるロシアの兵隊さんとの出会いともなったシベリア鉄道とも間もなくお別れだ。もう彼らと会うことも2度とあるまい。彼らも別れ難い気持ちを断ち切りたかったのだろうか、終着駅であるモスクワ・ヤロスラフスキー駅に着き列車を降りるやプラットフォームで別れの固い握手を交わすと、3人が3人とも1度も振り返ることなく、軍人らしく毅然として人ごみの中へ消えていった。お人好しの彼らから知ったロシア人という民族は皆が皆、決してあの戦争好きで冷酷非情なブーチンのような身勝手な輩ばかりではないということが分かった。

あれからちょうど 20 年が経つ。独身と言っていた

車を思い出した。こうして排泄物は雪の中へ消え、こっそり処理されていくのだろう。

3人の兵隊さんとは、会話の細かい内容まではとても理解しきれなかったが、凡そ話の見当はついた。ウラル山脈を越えアジアからヨーロッパに入る境界に建っていた大きな記念標識や、ヴォルガ川を渡る鉄橋が近づくと、分からない言葉で細々と説明してくれた。

流石に終着モスクワ駅が少しずつ近づくにつれお互いに別れ難い気持ちになり、センチメンタルになり沈黙することも多くなった。列車内では、あの狭い空間に1週間も缶詰状態の中で賑やかに、酒飲み同士がと



列車が途中の駅に停まると物売りのオバチャンが押し寄せてくるが、中にはこんな若い美人も……

彼らにも今では家族がいることだろう。カチューシャを追って行ったネフリュードフの気持ちは充分理解できたとは言えないまでも、彼が見た景色に触れられたことによって、「復活」へのとこしえの憧憬にけじめをつけた旅だったように思っている。